

子ども読者は何を受容するか (上)



長谷川 潮

一 翻訳の歴史

子どもの本・翻訳の歩み研究会編『図説 子どもの本・翻訳の歩み事典』（柏書房、二〇〇二）という事典がある（以下、『翻訳の歩み事典』と略称）。B5判、三九八ページ。「図説」と掲げているだけあって、巻頭の一四ページのカラー図版をはじめ図版が豊富である。

子ども向けの翻訳書に関わる小論文、解説、エッセイなど五〇本以上の記事や各種のデータを含み、「事典」と言うよりは総合的な「ハンドブック」である。さらにこの本の半ば以上を占めるのが、「〇〇一」という番号の『漂荒紀事』（一八四八・嘉永一）（これは『ロビンソン・クルーソー』である）に始まり、「九六二」番の『わたしは女王を見たのか』（ハミルトン）（一九七九）に終わる九六二個の、刊行年順に並べられた小項目である。この小項目の大部分は翻訳された作品の紹介であり、スペースは一定で、

八〇字程度の説明が付されている。つまりこの小項目を順に見ていけば「翻訳の歩み」をおおざっぱに知ることができる。なお、小項目の多くは図書だが、作品集の中の一編や雑誌掲載のものも含まれている。絵本はほぼ対象外のようだ。

この事典を使い始めたとき、わたしは少しとまどった。小項目のところどころに日本の作品および雑誌の創刊が入っているからである。今度全部の項目をチェックして、以下のような数値を得た。「〇二七」の『少年園』から「二八九」の『銀河』まで、雑誌創刊の項目が一一、「〇三三二」の『少年之玉』（三輪弘忠）から「九四六」の『故郷』（後藤竜二）まで、日本の作品が六一項目ある。併せて七二項目だから、全体の七・五%ほどが日本の項目である。

この日本の項目をリストアップして気づいたのは、これらを辿れば、日本の近代および現代の児童文学史がおおよそ成立するということである。つまり『翻訳の歩み事典』